



「やすらぎの刻」と参謀本部の議論を対比しよう

テレビ朝日でお昼に放映中の「やすらぎの刻」(倉本聰)の時代は先の大戦中。炭焼き、猟師の根来鉄兵に召集令状。鉄兵は、召集令状を破り捨て「戦争はきらいじゃ」「食う為でもないのに生き物を殺すのは性にあわん」と、山に隠れる。が、鉄兵の師匠は「お国に逆らうことはできない」と云う。こうして若者が戦場に駆り立てられた。

陸軍エリートは
半藤一利の「なぜ必敗の戦争を始めたのか」(文春新書)を読んで驚いた。日中戦争も対米英戦争も目標はうやむや。どこで止めるかも議論無く突入。

「関東軍特別大演習」と称して大動員。ヒトラーのソ連侵攻で極東ソ連軍兵力が減ったら攻め込もう。しかし、極東ソ連軍は動かず、攻め込めなかった。英米と戦い石油禁輸されると経済力は二十対一。とても戦えないとの報告を参謀本部は「国策に合わぬ」と破棄。学徒動員は将来日本を背負う若者に勉強をさせないこと。それは将来の日本の力をそぎ落とすこと。参謀本部のエリート達は、勝ち目の無い対米英戦争に突入。学生を死地に追いやった。

テレビ画面を上下に分け「やすらぎの刻」と「参謀本部の議論」を並行して見せたら良かったと思う。

徴兵を巡って庶民は四苦八苦。一方、参謀本部では「この戦争は無意味」という議論も出されていた。

特攻に散った若者にこれを見せたい。
あなたはどう思われますか？

白馬大池

長野県北安曇郡小谷村大字千国

二〇一九年七月



同年配の仲間五人で梅池に出かけた。梅池自然園まではロープウェイ。一気に千九百米まで上がれる。

そこから傾斜が急で大きな石がごろごろしている道をゆっくり登り、この白馬大池に着いた。

火山噴火による堰止め湖だそうだが、流入する川、流出する川はない。魚影は見えないが、オオサンショウウオが沢山いる。

白馬大池山荘に泊まった。翌日、朝早く池畔に出ると・・・水面が、まるで鏡。風が無く、さざ波もたっていない。

急いでスケッチしていると、間もなく、さわやかな風が吹いた。鏡のようだった水面にはさざ波が立ち、向かいの山々の鏡の像は消えてしまった。

蓮華温泉に下り、温泉を楽しんだ。

